

さいたま市立大原中学校 学校だより



新しき光



さいたま市立大原中学校

TEL 048-831-5397 FAX 048-835-1357

WEB <https://ohara-j.saitama-city.ed.jp/>

第4号

校訓「歴史を拓く」 学校教育目標「はつらつとした生徒、地域に輝く学校」

令和7年6月30日発行

Big Wave

校長 越智 宏明

学校総合体育大会に体育祭、期末テストと、6月は大きな行事が連続した1ヶ月でした。学校総合体育大会では、様々な会場で大原中生の最後まであきらめない、不屈の闘志を見ることができました。多くの3年生はここで引退となりますが、これまで仲間たちと共に積み上げてきたことは、これから先の人生で必ずや活かされることでしょう。自信をもって次のステージに向かってください。

昨年度までの2学期開催から1学期開催に移行し、6月21日に開催された体育祭当日は、大変暑い一日となりました。大勢の保護者や地域の方の応援をいただき、生徒たちも最高のパフォーマンスを発揮することができたのではないのでしょうか？もちろん運動の得意な生徒もいればそうでない生徒もいます。生徒全員が参加する大縄跳びや全員リレーではプレッシャーに潰されそうな思いの生徒もいたことでしょう。しかし、今年の体育祭、「全員で楽しむ!」という生徒たちの思いが勝負への執着を乗り越えていたように思えます。誰もが自分に出来る精一杯のことをし、周りで見ている仲間や先生たちが、必死でそれを応援する様を何度も目にすることができました。

その生徒たちの思いが溢れたのは、閉会式でした。大原中の新たな恒例になりつつある、校庭の真ん中での体育委員長によるマイクパフォーマンス。全校生徒がグラウンドを取り囲むように一つの輪を造ります。その中心で体育委員長が、「悔しさや嬉しさを超えた価値がここにはあると思います。みんなのパッションで駆け抜けた、みんなが主人公の体育祭でした」と熱く語った瞬間、グラウンド中から割れんばかりの歓声と拍手!私は、朝礼台の上からその様子を見ていましたが、ただの勝ち負けを超越した、全校生徒で「何か(それは友情かもしれないし、感動かもしれません)を掴み取る」という今年のスローガンが、正に達成された瞬間だと認識しました。

そして、その後、私は同じ場所で、何とも言えない、幻想的な光景を目にすることになるのです。

全校生徒が肩を組んで校歌を歌い上げた直後、どこからともなく自然発生的にウェーブが沸き起こったのです!それはグラウンドの北側からゆっくりと時計の反対周りに大きなうねりとなって進んでいきました。校舎側にいた生徒は、うねりがこちらに突き進んで来ているのに気が付いて、一旦ほどいた肩を慌てて組み直しています。それは大海原を猛々しく突き進む荒波のようにも、北極の夜空を神々しく舞うオーロラのようにも見え、こんな特等席でそれを見させてもらえる自分の幸運を噛みしめていました。

数日後、一人の3年生の女子生徒と廊下ですれ違った際、彼女が、「校長先生、体育祭のあのウェーブ、私が始めたんです。次から次へとウェーブが広がっていくのを見ていたら感動しちゃって…。大原中のみんな、好き!ってなりました」と嬉しそうに言ってきました。この一言に今回の体育祭での大原中生の気持ちが全て凝縮されている気がして、私は何とも言えず心が温くなるのを覚えました。彼女にすれば、おそらく、体育祭のフィナーレに感動して無意識にとった行動だったのだと思います。この感動を何かの形で表したい、それをウェーブで表現したのでしょが、実はそこにいた約700名の大原中生全員が同じ気持ちだったのだと思います。彼女が始めたウェーブに次から次へと同調し、小さなうねりは、あっという間に学校全体を飲み込んでしまいました。

中国の作家魯迅は、「思うに希望とはもともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」という言葉を残しています。願いを叶えるためには、誰かが最初にその想いを口にして、一步を踏み出すことが大切なのではないでしょうか?思い切って、自分から「最初の一步」を踏み出すことで、その一步に続く人が必ず現れるはず。

一人の生徒が始めた小さなウェーブは、大原中生の無限の可能性を教えてくれました。



体育祭閉会式の後、自然発生的にウェーブが起きました。小さなうねりは、あっという間に大波となり、大原中全体を飲み込んでしまいました。